

新刊紹介

◎タウンヤ—東南アジアの混農林— (Taungya—Forest Plantations with Agriculture in Southeast Asia—, C.F. JORDAN・J.GAJASENI・渡辺弘之編, Sustainable Rural Development Series No.1, CAB International, Wallingford, UK, 1992, xiv+153 pp, 邦価約 5,500 円)

タウンヤ, あるいはタウンヤ法というのをご存知だろうか。この本での説明をそのまま用いよう。『タウンヤとは農民が樹木の種子あるいは苗木を植栽し, その保育を行う造林法である。その見返りとして, 農民は初めの数年間は苗木の間で作物を栽培することが許される。』タウンヤとはビルマ語で“丘陵地 (taung) の耕作 (ya)”を意味するそうである。樹木と農作物を同時に植栽することから, タウンヤはアグロフォレストリーの一形態とされている。しかし, タウンヤはあくまでも造林の一手段であり, その主目的は用材生産にある。農作物の生産をより重視する他のアグロフォレストリーとは, この点で一線を画するものであると編者らは主張する。また, タウンヤの主体は, 一般に政府機関や民間企業である点で, いわゆる“社会林業 (social forestry, community forestry)”などとも異なるとする。

第一部ではタウンヤの歴史と現状, 技術的問題, 社会・経済的問題が扱われる。第二部はタイ, インドネシア, フィリピン, ネパール, インド, 中国のアジア諸国におけるタウンヤの現状についての概説である。1990年夏に横浜で行われた第5回国際生態学会でのシンポジウムを基に, アジアを中心とする9か国14人によって分担執筆されている。編者らのタウンヤの定義は明快ではあるが, かなり狭義なもので, 異論があるかもしれない(本書執筆者間でも統一されているとは思えない)。しかし, タウンヤのみに焦点を絞り, その目的と性格をきっちりと規定したことで, アグロフォレストリーを扱う本につきまとう煩雑さを抑えることにはかなり成功している。第二部では, 本書で提案された狭義のタウンヤが, 様々な社会・経済的状況から変革を迫られてきた実情も読み取れる。タウンヤは熱帯林再生の有効な手段になり得るであろうか?(伊東 明)